

「北の国から」の倉本聰さんを襲った多臓器不全 重症感染症を契機に複数臓器が機能不全

「北の国から」シリーズや「前略おふくろ様」など、数多くの名作ドラマを手掛けた脚本家の倉本聰さんが9月18日、多臓器不全のため北海道富良野市の自宅で亡くなりました。91歳でした。

多臓器不全とは、肺炎のような感染症や急性膵炎（すいえん）などの疾患をきっかけに、制御不可能な全身性炎症が起き、複数の臓器が短時間の間に機能不全に陥る状態です。大きな病院では集中治療室（ICU）で治療を要する人の4割ほどに多臓器不全がみられます。多臓器不全はどういう病態で、予後はどうなのでしょう。

肥満の50歳男性Aさんは、会社健診でも高脂血症と糖尿病を指摘されていましたが、放置したままです。ある日の昼食後に、急にみぞおちから背部にかけて激痛が起き、気分不良で嘔吐（おうと）しました。意識がもうろうとし、同僚が救急車を呼び総合病院の救命センターに搬送されました。意識は呼びかけに反応する程度で、血圧も下がりショック状態です。

■原因は肺炎、胆管炎、腹膜炎…

2種類のカテコラミン（強心剤）を投与し、血圧を保ちながらCTなどで検査すると重症急性膵炎と診断されました。ICUで集中治療を受けて一時期、呼吸不全で人工呼吸器治療を、急性腎不全で持続的血液濾過（ろか）透析（CHDF＝透析の一種）の治療を受けました。1週間ほどですべての臓器障害は改善し、現在は内科病棟で高脂血症の治療を受けています。

重篤な肺炎のように感染症では病原体から、その成分の一部が血中に放出されます。急性膵炎では膵臓の消化液で傷つけられた組織から、重症外傷では外傷で挫滅した組織から、壊れた細胞成分が大量に血中に流れ出します。これらの成分は、体内でマクロファージや好中球などの白血球を活性化します。活性化した白血球からはサイトカインと呼ばれる物質が出ます。

大量のサイトカインが血中に一気に放出されると、免疫細胞が過剰反応を起こし、炎症反応と抗炎症反応が同時に進行し免疫が破綻し、制御不能に陥ります。その結果、血管や臓器の細胞が傷つき、血液や酸素が組織に届かなくなります。このような病態が臓器不全の臓器で起こっています。

この病態を起こす原因で多いのは、重症感染症（肺炎、胆管炎、腹膜炎、腎盂（う）腎炎など）、重症の外傷や熱傷、重症急性膵炎や出血性ショックなどです。日本では重症感染症に伴うものが最も多く、感染の原因は肺炎と、胆管炎や消化管穿孔（せんこう）など腹腔内感染が多くなっています。感染を原因として起こる全身性炎症反応で臓器障害を伴うものを「敗血症」と呼んでいます。

傷つけられる臓器で多いのが肺で、次いで腎臓や肝臓、血液や脳などのケースもあります。治療は原因疾患の治療（細菌性肺炎なら抗菌剤治療）をするとともに呼吸・循環管理をして、腎障害が起きると CHDF などを使います。新型コロナウイルスによる重症肺炎では ECMO（体外式膜型人工肺）が使われましたが、これも多臓器不全の治療の一環です。

日本では、肺炎や胆管炎などの腹腔内感染を契機に敗血症を発症、腎障害や循環不全を併発し、多臓器不全に陥る 75 歳以上の高齢者が多いようです。多臓器不全に陥ったとき、高齢者や血圧が下がりショック状態の人、臓器不全の臓器数の多い人の予後は不良です。